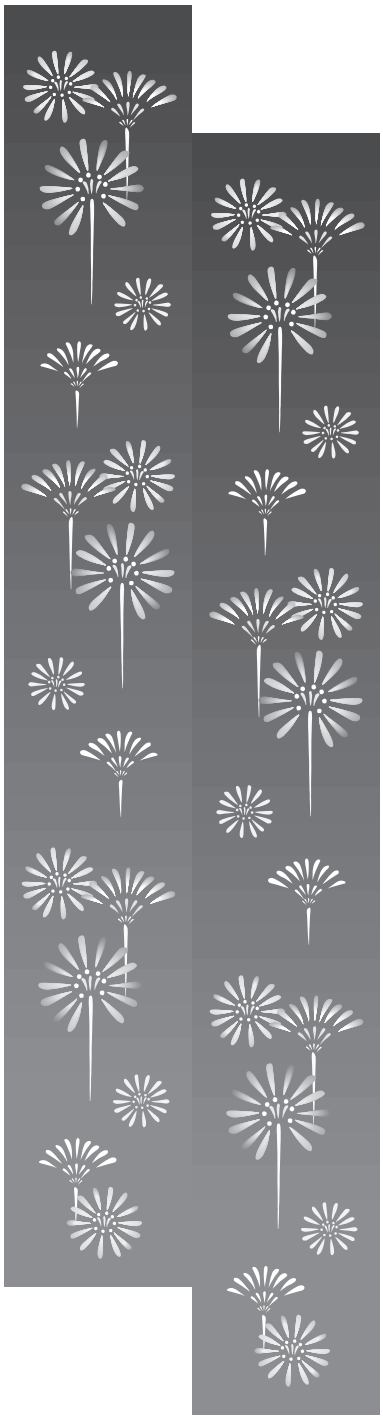
緑陰随想



わが家の三犬
渡島医師会　森口修身

私見　後期高齢者医療制度
空知医師会　小林公民

アメリカ合衆国日本州
芦別市医師会　尾崎　崇

夢の丸太小屋に住む
帯広市医師会　村越敏雄

残念なこと
岩見沢市医師会　松本光博

自転車で何処までも走れ！
小樽市医師会　髙村一郎

会津の旅
十勝医師会　栗林秀樹

追悼記
－無二の親友 故藤山寛美をしのんで－
日高医師会　堀田　温

沖縄家族旅行
上川郡中央医師会　水野清司

「医師」？「医士」？
遠軽医師会　田端秀行

私と固定観念
寿都医師会　秀毛寛己

医療危機の時代に思う
旭川市医師会　渡辺一晶

（順不同・敬称略）

わが家の三犬

渡島医師会
幾世橋医院
森口修身

満州生まれで戦後貧しい時代を過したせいなのか、衝動買いなどは全く無縁のことだと思っていた。こともあろうに、還暦を過ぎてから二度も同じ衝動買いをしてしまい、嬉しくもあり、また楽しくもあるが大変な毎日を送っている。

6年前、動物が苦手という妻が夫婦二人だけとなって寂しくなったのか、ネコは駄目でもイヌならどうにか付き合うというので、気の変らぬうちにと、一度は飼ってみたかったゴールデン・レトリーバーの小犬一匹を買ってきた。小学生のころ、家の玄関横で犬を飼った記憶はあるが、汚い小さな壊れかけた犬小屋の前にいつも繋がれ放しで、雨の時も吹雪の日も小屋の奥深くに小さくうずくまっていた。

朝5時起きの小犬の世話が始まって間もなく、妻が突然一過性脳虚血発作で倒れ予期せぬ入院となり、毎日の診療をしながら小犬の世話をすることはとても無理ということで、犬好きの知り合いに世話を頼むこととなった。

妻の入院は一週間でひとまず事無きを得たが、病気の再発も懸念されたので小犬の世話は2カ月間のお預けというハプニング。見た目だけで犬を選んだことや自分流の思い込みで育てたことが災いしたのだろうか、成長するほどにいたずらが高じ、手拭や手袋などくわえたものはどれも皆咬み切ってボロボロにしてしまう。散歩用の牛革製リードを丸ごと食べたり、散歩の途中なにが気にくわぬのかテコでも動かない。裏庭の隙間から逃げ出して、保健所はもう開いていないから警察へ引き渡したとの連絡があり、暗い夜道を警察署に出向くと、暗い廊下の先から体格の大きな警官を引きずるようにして出てくる。不肖の息子を引き取りにきた親の心境だが、人間ではないので遺失物受領書にサインをさせられ、頭を下げて帰宅した。

これだけならまだいいが、庭に落ちている数センチもの石を何個も飲み込んで吐き通し、その挙句の果てに三度の切腹騒ぎと相成っては、庭の全面改造とついでに家の改築まで随分と高い買物になってしまった。

本当はこれで終わりのはずだったのだが、3年が過ぎたころから妻が思いがけずもペットロスなどという流行の言葉を口にするようになり、当分は黙んまりを決め込むつもりでいたものの、ひょんなことからシェパードの小犬十匹の群団を見るに及んで不覚にも二度目の衝動買いをしてしまった。

梅畑を整地したわが家の犬の運動場

シェパードの小犬は成犬のイメージから程遠く、両耳が垂れて足が太くその可愛さは驚きの新発見だった。雄と雌二匹の方が仲が良いなどと下手な理屈を付けた無計画さが災いを呼び込んだのか、二匹を飼い始めて間もなくとんでもない光景に出くわしてしまう。犬がウンチを食べることがあることは本にも出ているが、目の当たりにするのは初めて。まさに驚天動地とはこのこと。おそらく、わが家に来る前に食物をいつも食べ損ね、空腹のあまりウンチを食べてしまったのではないかと想像してみた。毎日の排便の世話に疲れ果て保健所行きを口にした途端、動物嫌いのはずだった妻から無責任男と罵倒され、それではと食糞防止薬ディーターを試み程々の効果はあったものの完全ではなく、結局は訓練所での手当てをお願いすることになった。

それから3年が過ぎ、ウンチ食いの悪夢は夢のまた夢、今や立派な警察犬になって新聞の地方版にも紹介され、山菜採りの行方不明者やコンビニ強盗などの捜索に活躍中だ。毎年10万匹以上の犬が殺処分されているというが、あの時保健所行きをしていればその片棒を担ぐことになったかもしれず、罵倒してくれた妻に感謝しなければならない。

わが子育ても親の思い通りにいかなかったように、犬の子育ても焦らず、急がずやっていくべきなのだと、今になって理解できたような気がする。

作家の馳星周氏は愛犬を看取った記録“走ろうぜ、マージ”の中で、犬を飼うということは無知からの脱却ー勉強だと述べている。

これから私も後期高齢者への仲間入りをすることになるが、足腰を鍛えて三匹との生活を楽しんでいきたいものだ。

私見
後期高齢者医療制度

空知医師会
小林産婦人科医院　小林公民

この4月よりもう始まってしまったこの制度については、姥捨山だとか機械的で冷たいとかえらく評判が悪く、大幅に見直しされそうであるが、私はむろん大賛成でないが、まあやむを得ないかなとも思っている。

もともと医療は金のかかるものである。その恩恵を受けるにはかなりの費用を要した。ひと昔前は田畑売らないと病院にかかれないといった話もあったくらい。従っていわゆる赤ひげ先生は貧乏人からはお金は取るに取れなくて医院の経営は大変だったと聞いた。

しかし、今は国民皆保険制度のお陰で気楽に受診可能となっている。これに出来高払いも堅持されて、医療側にも大きな利点となっていよう。むろん当然ながらこの皆保険制度は国民一人一人が守り育てていく必要がある。そのためには納税の義務を果たし、保険料をきちんと払い、日頃健康に心配りする、そういう義務を果たしている人が対象であって、全く自分の不注意による疾患は対象外である。だから例えば自殺未遂の処置は本来自費のはずだが。

どうしても保険料も払えないくらい困窮の場合は、セーフティーネットとしての生活保護制度がある。しかし、この生活保護は最先端の医療レベルまで保障しているとは思えないのであるが、いわんや通院のハイヤー代に何千万も払うなんて論外であろう。

反論も多いと思うが私は、乳幼児、老人医療無料制度が悪かったと思っている。医療はタダと思わせてしまった。タダより高い物はない。タダではありがたみが全くなくなり、診てもらって当然、一寸気に入らないと、自分は義務を果たしてないのにすぐクレーム、いつの間にか患者様と呼ばれる身分となった。その延長として救急病院のコンビニ受診やハイヤー代わりの救急車利用もあろう。

以前、夕張市でも救急車出動の年間800件のうち100件以上使った人もいたとのことで、1回3～4万かかるのまでタダと勘違いしたのか、われわれができる限り親切丁寧に診るのは当然としても、せめて一時お金は払うべき（後で還元されても）で、以前、真夜中に起こされても全く無料ではいささか釈然としなかった（人間ができていないもので）。何と言っても医療は金がかかるのである。どのくらい負担してどの程度の医療を受けられるかの問題であろう。高負担高福祉も一つの道だが、集めた金をごっそり目的外に使っても誰も責任取らない国では安心できない。さりとて低負担低福祉では心許ない。では中負担中福祉でそれ以上は自己負担でも仕方ないとなろうか。

よく日本の医療費はＧＮＰ（国民総生産）の比率が先進国でかなり低いといわれている。この場合の医療費はどの範囲までいうのか、病院に払った額のみか、今の老人はサプリメントやマッサージ等にかなり金を掛けて、病院代より高い人もいるらしいが、それも含むのか。高い比率の米国では日本式の皆保険はなく、自己負担がべらぼうに高く、緊急以外の手術は日本に戻ってした方がよいとか。そのため病気になっても病院にかかれない人が増え、医療問題が最大の政治社会問題となっている。それぞれの先進国でも医療問題は最大のテーマで模範となるようなうまくいっている国はなさそうである。

平均寿命になったら保険を打ちきって全部自己負担の国、医師がハイヤーの運ちゃんをしている国、自己裁定の極めて狭い国、ともかく懐に一銭もなくて救急病院に飛びこめる国はなさそうである。

その点日本の患者さんはなんといっても恵まれていよう。日本の病院の医療費は絶対安いのである。そのため医師はじめ医療関係者に過重な負担をかけている。医療崩壊したら元も子もない。医療は進歩とともに莫大な金がかかる。応分の負担をして、この世界に冠たる皆保険を守りたい。全部といわないが今の年寄りはそれなりに優雅に暮している。老人も子孫にツケを回さないように、子育て世代に負担を掛けないように、多少の負担は当然という気構えが欲しい。個人レベルでは子どもたちに少しでも残したいと皆思っているが、社会レベルとなると負担なしサービスはいっぱいとなりやすい。もっとも今の子育て世代は実質的に親を看る必要がない時代だから、老人も自分のことだけ考えて良いのかも。

さて、同年齢であるわが夫婦は来年めでたく後期高齢者となります。

今はぼけ防止に外来をやっと開いている状態ですので、医師国保もほんのわずかで済んでいますが、これからは年金等も合算されて、2人合計すると今までの何倍かになりそうです。しかし、それでも私は後期高齢者医療制度を渋々支持します。

アメリカ合衆国日本州

芦別市医師会
芦別精療院
尾崎　崇

昨今、日本の小学校で英語の授業を行うよう文部科学省が全国の国公立小学校に指令を出し、現実に行われています。これは、文部科学省の学識経験者というお偉方から構成される諮問機関で決ったそうです。

いっそ小学一年生、いや幼稚園から日本語を止めて全て英語にしたほうが、かえって英会話力は向上するのではないでしょうか。もう日本人・大和民族などという民族はやめて、全てアングロサクソンの人々に従順に言いなりになったほうが、手っ取り早くていいのではないでしょうか。日本民族・大和民族解体！

日本の有知識者と称する連中は一体何を考えているのでしょう。そして小学校から英語教育をするというと、大多数の父兄が賛成します。有知識者と称する彼らは、確かに知識はたくさん持っています。今はインターネットと称するもので、指先さえ器用ならばいろいろな知識は目に入るし、森羅万象あらゆる事柄を知ることはできます。ただし、知識はあっても知能や教養は全く別の問題で、知識を基にして、良く考え、独自の考え方を持つことが大変大事ですが、彼らには知識があっても知能が十分ではありません。

「知能のない人間が狭い視野から中途半端な英語教育を行い、その結果、子どもたちが将来大人になったらその人間の人格や教養はどうなるのか？日本国家が将来どうなるのか？」などという広い視野に立って物事を考えているのでしょうか。

確かに、日常の英会話力はいくらか上達しますが、その人間の中身はどうなるでしょうか…。もっと大事なことは、他の諸外国の中でも有数の優れた遺産として、日本人が古来から受け継いできた固有の文化・文明はどうなるのでしょうか。日本語の語学力をもっと高めて、これらの遺産を修得し、日本の古文を熟読して、日本の優れた文化・文明を身につけて教養ある社会人になることが、もっと必要ではないでしょうか。

日本語も半分、英語も半分、こんな人間はどこに行っても使い物になりません。テレビで田舎の高齢者の夫人が釣りをして魚が獲れると“ゲットした”と言います。“獲”という字が読めず書けないのです。最近やたらと“カナ文字”の会話が多く、使えば使うほど自分は優秀な知識人だと思い誤っている方がいます。そのような人間に「先ず日本語で正しく話し、正しく読み、正しく書くようにしろ」と言いたくなります。このような人間には、恐らく明治時代の有名な小説も原文では読めないのではないでしょうか。いわんや古文においても然りです。

官僚の書いた書類を見て、“てにをは”を訂正する、重箱の隅をほじくって嫌がらせをする小さな政治家や高級官僚と称する連中。そして世論ばかりを気にしている政治家、マスコミなどが目に付きます。

世論とは、例えばアメリカがイラクに攻め込むとき「賛成79%、2年後39%、5年後の昨今29%」などその時の状況によって変動します。民主主義とは主権在民が大前提です。しかし、それは“国民が成熟した判断をすることができる”という条件が絶対必要です。今の日本は、世論におもねる曲学阿世の人が政治や経済を動かしています。

自分の利害・得失は考えず、自己中心的な考えを絶対持たず「誰がなんと云おうとも日本の将来はこう在るべきだ」「日本の将来は自分が担うのだ」という信念を持って「現時点では最善の行き方である」と胸を張って堂々とわが道を行く、そんな沢山の教養・知能を持った人間が出てきて欲しい。英会話などできなくて結構です。

夢の丸太小屋に住む

帯広市医師会
むらこし内科医院
村越敏雄

ログハウスに住んでから、かれこれ10年目になる。少し不便なところや、風が強い冬の日は寒いとかを除けば、かなり気に入っている。わが家のログハウスはフルログといわれるタイプのもので、カナダから輸入したダグラスファー（米松）を、ログビルダーが一本一本皮を向き、チェーンソーで加工したものでできている。普通の家でいえば1階部分が直径30～40cmの丸太10本の横積みで、2階部分はロフトといって、ポスト＆ビーム（柱と梁）工法である。壁は漆喰である。クロスは一切使っていない。家具も、ログハウスメーカーの作成によるものですべて木製である。森の木の中にいるようで気分が開放される。わが家に来たお客は皆、多弁になるようだ。木のせいかもしれない。

初めは郊外で、農家の真似事や、女房の好きな園芸（ガーデニングともいう）をする土地がほしくて、週末になると二人で田舎をうろついていた。さらに、ゴルフ場が近く、買い物も便利なほうが良い。あまり山の中では寂しい。いろいろな欲望のカオスの中で、2年ほど探索を続けた。そんな時、知り合いの不動産業者の人から、「少し高いんですがどうでしょう」と連絡があった。田舎にしては高いが、都市部から見るとかなり安い。ゴルフ場も温泉も近い。小さな集落

もあり、治安もよさそうだ。即決した。

小さくて、休憩できる程度の小屋を作るはずだった。しかし、いろいろな別荘のカタログを見ていると欲望が刺激されて肥大化する。設計してみたら、病院に併設した自宅よりかなり大きくなっていた。岩風呂とサウナを作った。畑も作った。ロックガーデンも作った。芝生も張った。おまけにグリーンとバンカーも作った。欲望のてんこ盛りだ。こんなに贅沢をして罰が当たるぞ、と思った。しかし、人生は意外に短いかもしれない。おいしい卵焼きは、先に食べるのが私の主義だ。

その後、薪ストーブにくべる薪がほしくて清水の旭山に山林を少々買った。山林を開発するのに必要なので、ユンボ（パワーショベルのこと）を買った。その能力の高さに虜になった。木の移植など一瞬で終わる。庭の造園もとてもはかどる。小さなせせらぎや、凍上しないように90㎝の砂利を敷き詰めた。レンガ舗装の通路も素人のくせに、そこそこできてしまった。慣れるまでに、塀とか庭園灯とかを少し壊してしまったけど。ポルシェに乗っている医者は多いかもしれないが、ユンボを使える医者は俺ぐらいだろうというのが、しばらく口癖になった。

田舎の朝は早い。春になると毎朝5時に起きる。隣の農家より早いこともある。まずグリーンを刈る。専用のグリーンモアーで時間の余裕があれば2回刈る。次にハウスの見回り。ゴールデンウィークのころからスイカ、きゅうり、メロン、トマト、ナス、パプリカ、ゴーヤなどをハウスに植えている。作物に負けないくらい雑草、特にスギナが繁茂している。もっと暖かくなると、露地に、とうきび、エンドウ、枝豆、インゲン、大根、レタス、ブロッコリなどを植える。そのほか、りんご、ぶどう、すもも、梨、イチゴ、ブルーベリー、ラズベリー、ブラックベリー、アスパラ、ルバーブ等が植わっていて、それぞれの季節ごとに楽しませてくれる。

とにかく春は仕事が多い。しかし春の仕事は楽しい。先行投資の楽しみなのだ。数カ月すれば豊穣な実りがあり、きれいな姿の花も咲く。夏の仕事はつらい。暑いのもつらいが、雑草取りなど現状維持であまり華やかではない。太い腹にはかがむ姿勢もつらい。雑草取りは女房の独壇場だ。手際も良いし、仕上がりも立派だ。どうも機械を使わない単純作業は苦手だ。仕事振りに性格が出ているようで、なんとなく引け目を感じる。ゴルフに差しつかえるから早めに退散する。

芝刈りは私しかできない。芝刈り機が結構重く、女の力ではもてあます。夏は芝がとても激しく成長する。週に2回は刈る必要がある。木の周り、花壇の周り、池の周りなど込み入った構造をしているところを刈るのは時間と技と力が必要だ。無理をすると腰と腕を痛める。刈った後の芝の処理も大変だ。ユンボで穴を掘り、そこに埋める。しばらくすると堆肥化していることもあるが、いい加減に埋めている。あちこちに穴を掘り続け、そろそろ掘る場所がなくなってきた。昨年から、堆肥作りに利用する方法を考えて準備中だ。

秋はりんご、ぶどうの収穫が一番の楽しみだ。肥料をやり、暑い日にマスク、ゴーグル、ビニールの外套を着て、眼鏡を曇らせながら農薬散布を厭わないのも収穫の楽しみのためだ。りんごは旭というあまり市販していないものだ。酸味が強く、一部に熱烈な愛好者（年配者が多い）がいるりんごだ。数百個取れるので、当然わが家だけでは限界があり、知人に配っている。おおむね好評であるが、生産者としてはもう少し摘果して個体を大きくしたいと考えている。

ぶどうはいわゆる「白ぶどう」ナイアガラとかポートランドが寒冷に強く、甘い果実ができる。一時、巨峰も植えていたが「巨」とはいえず、娘は「中峰」といって笑っていた。秋には棚から下ろし、春には石灰と肥料をあげるのが甘くするコツのようだ。農作業の疲れを癒すのには最適な味である。

冬の暖房は床暖と薪ストーブの併用で過ごす。ストーブの暖かさは、温度だけでなく心理的に心の底から温かくなる。薪の燃える炎を見ているだけで、長い夜もあっという間に過ぎ去る。薪を焚いていると外で良い木の香りがする。薪はわが家の冬では必需品だ。冬の支度は、薪作りから始まる。ログハウスを建てたときに買い入れた雑木の薪と知人の紹介でもらい受けた木っ端が原料だ。この木っ端は膨大な量で、数十年かけて木工好きのおじいさんがガレージにびっしり貯めたものだ。1.5㎥の芋かごに6個ある。2年間はもつ量だ。これを小さなプラスチックの篭に小分けして、地下で乾燥させつつ燃やしている。雑木の薪は、ストーブに合うように適当な長さにチェーンソーで切り分け、屋根のあるデッキで乾燥させておく。買い置いていたものが今年で底を突いたので、今年の秋までに旭山から切り出してこなければならない。生きている木を切らなくても倒木がかなりあるので、しばらくはそれで間に合いそうな気がする。

このようにして1年が過ぎていく。都市部では忘れていた時間の感覚、季節感、アナログな生活感に満ちている。横殴りの雨では雨漏りし、吹雪のときは室温が下がり、時々いろいろな虫が室内を闊歩しているが、それもまた自然の中で生きている自分を実感させるための大切な出来事である。

残念なこと

岩見沢市医師会
松本皮フ科クリニック　松本光博

政府はここにきて、勤務医とりわけ小児科医、産婦人科医の不足と救急医療の量的な不足をうけて医師数の抑制策を撤回して、増加策に転換するとの記事が先日の新聞に載っていた。勤務医の不足は政府が考えるような医師数の不足が原因ではなくやめる医師が多いのが原因である。決して高いとはいえない給料、当直をこなしながらの36時間診療、訴訟リスク、刑事罰を科せられかねないリスク、不当な要求を突きつける問題のある患者などがやる気をなくさせる原因と思える。それならば自分の能力で、自分のペースで開業して勝負してみたいと考えるのは当然である。

いま政府のやるべきことは医療・介護・福祉の予算を大幅に増額し、あわせて将来のために教育に力をいれるべきであって、道路をつくり続けることではない。後期高齢者医療制度の創設や道路特定財源を10年間で59兆円も道路建設にあてるなどの施策は、前者は企業と国の負担を減らすとともにこの人たちの診療報酬を国保、社保より低く抑えることを狙ったものと思われる。後者はいうまでもなく土建業の保護以外の何物でもない。うがった見かたをすれば政府は企業と選挙の票田である土建屋以外の面倒はこれ以上みられないともいえる。人口減ですでに日本の自動車保有台数は減少しつつありこれ以上の道路はどう考えてもいらない。そればかりか道路や橋の維持補修にはかなりの予算が必要となり、つくればつくるほど歳費をさらに圧迫するのは必定である。すでに介護の世界では過酷な労働にもかかわらず職員の給料は安く抑えられている。このままでは医療関係者はワーキングプアになりかねない。報酬の低下はモラルの低下、医療の質の低下、意欲の低下につながりかねない。このままでは残念ではあるが必然的に美容形成、内外の富裕者向けの検診や保険外診療に活路を見出そうという動きも強まっていくものと思われる。

厚労省は現在の予算配分の枠組みの中で帳尻合わせを行おうとしている。そのためにしていることが老人医療費の抑制である。2世代3世代同居は珍しいこの時代に慢性期の療養を在宅で行わせようとしている。その結果、老老介護の割合が高まり、ますます高齢者の負担を増やすだけだと思われる。この政策の意図するところは慢性期の治療が主体の中小の病院は削減し、ゲートキーパーであるとともに在宅医療を担う開業医と手術や救命医療、急性期医療、臓器移植、癌治療それに画像診断を行う中核病院の二つだけを残して医療費のさらなる削減を図ろうとしているように思われる。これを解決するには先に述べたように政策の大転換が必要だが、強力なリーダーシップなしには成し遂げられない。いま私たちができることはどのような施策が行われるかを理解し、それに備えることだけである。

話は変わるが、もう一つ残念でならないことは外来管理加算の時間要件である。これは行政が医師の裁量権を侵すものであり、患者にすれば同じ診療であっても負担額が変わって誤解と不信感を助長するものでもある。交渉の経緯は知らされていないので的外れな非難かもしれないが、とりわけ残念なのは交渉の場には診療側の代表もいたはずなのにこれを受諾してしまったことである。彼らは一体何を守ろうとしてこのような譲歩をしたのだろうか。本来すべきだったのは、点数は半分に下げても病院でも算定できるようにするべきであろう。それがかなわないのならば再診料をあげて思い切って廃止するよう逆提案すべきだったと思う。また、これが他の指導料への時間条件の導入のきっかけにもなりかねない。残念でならない。ワーキングプア、後期高齢者医療制度、年金崩壊、モラルの低下、格差社会と拝金主義。医療も含めて日本が暗い方向に進む転換点にきているように思えてならない。せめて道路が必要だなどといまだに声高に叫ぶ政治家や政党を支持しない、落選させてやる程度のことはする必要がある。大変暗い内容で、また皆さんすでに分かっていることと思われ恐縮ですが、あえて書かせていただきました。

自転車で何処までも走れ！

小樽市医師会
高村内科医院
高村一郎

私は昨年8月に「自転車を買おう」そう思い立ちました。というのも中学生になったとき父親が買ってくれたのは黒塗りの貨物運搬用だったからです。わが家は米穀店でした。中学高校と荷台に米を積んで配達したものです。そのころからドロップハンドルがあこがれでした。中年を迎えようやく40年越しの念願を叶えるときがやってきました。専門店に出かけるといかにも自転車の好きそうな店主が「ロードレーサー」なら楽に乗れるし遠くに行けると言います。話に乗せられた私はカーボンの超軽量車を選択しました。サイズを計測してぴったりの自転車を発注し、ヘルメットと手袋、専用の靴、派手な色彩のウエアまで揃えてさあ出発！

昨年のお盆は好天が続きましたので、休み中は連日サイクリングに出かけました。お盆休みの最終日はいよいよ積丹半島半周に挑戦です。絶好の快晴に恵まれ、小樽駅から6時発の長万部行に乗り込むと函館本線の小沢駅に着くのは8時過ぎ、自転車を組み立てると早速国富方面に向かいました。少し霧のかかった朝の空気が新鮮です。なだらかな道が続きペダルを踏む足も軽やかに泊村へと向かいます。

原発に近づくと道路が広くなり、大変よく整備された雷電国道（国道229号線）です。岩陰に隠れて見ることのできない原発を通り過ぎ、神威岬まで海岸線をひたすら北上しました。神恵内村に入ったころ、サイドカーを交えたバイク集団が私を追い抜いてゆきました。雷電国道には沢山のトンネルがありますが、道幅が広く車も少ないので安全です。海岸線を左手に眺めながら快適に進みました。さらに北上すると幾つかの岬を通り過ぎ、次第に神威岬へと近づきます。途中であまりの暑さにペットボトルを何回も買い換えました。

無理かなと思いましたが神威岬にも登ってみました。傾斜がきついので歩く方が早いくらいです。駐車場までたどり着くと先ほどの一団が先に着いています。そこからは自転車をおりて木の階段を徒歩で岬に登りあこがれの積丹ブルーを瞼に焼き付けました。

元の道に戻ると積丹半島北岸を東に向かいました。そこからが大変でした。半分以上ペットボトルの水を飲んでしまったところで野塚・婦美の間の上り坂にさしかかったのです。でも入舸には店も自動販売機も見あたりません。そのまま坂を上り始めましたがすぐに水がなくなりました。でも汗は流れ続け脱水状態になり、とたんに頑張りがきかなくなりました。途中何度も休憩し、やっとのことでピークにたどり着きました。

ほっと一息つき、さわやかな風をあびながら坂を下り始めました。平らな道にたどり着いたのですが、ここでまた一大事です。平らな道なのに全然スピードが出ないのです。坂道を登ってくたびれた後では、平らな道なのにのろのろ運転でペダルを回すのが精一杯でした。そんなに疲れているのかと思い大変焦りました。実はあとで調べるとそこは平らではなく斜度1.5％の緩い登りだったのですが、まったく気付かないほど疲れていました。途中に自動販売機がなければ倒れていたかもしれません。水分を補充し、頭からもじゃぶじゃぶ浴び日陰で休みました。その後も二つ目のピークに向かって、休んでいるのか上っているのかわからないような遅さでふらふらしながら登りました。

やっとピークに達するとあとは下り坂ですが疲労が回復しません。そろそろと進みながら美国に着いたときには本当に疲労困憊です。積丹のウニ丼を食べるしかありません。食べ終わってからしばらくは動けませんでした。

十分な水分と炭水化物を補充して再び元気いっぱいペダルを踏み、余市町にたどり着いたのは4時近くでした。結局120km余りを正味6時間かけて走り続け、無事輪行を終えました。

それから現在まで雪の積もった時期以外は毎週のように走り続け、ロードレーサーを入手してから今日までの走行距離は3,000kmを遥かに超えました。タイヤ、ブレーキ、チェーン、ギアなどもすり減って一度取り替えるほどのめり込み走り続けています。サイクリングを始めてみたいとお考えの方は是非私のブログもご覧下さい。

http://web.mac.com/tubador/

会津の旅

十勝医師会
くりばやし医院
栗林秀樹

結婚前、会津の喜多方という町に一人で旅をした。酒屋が離れを提供しているユースホステルで、泊りは私を含めて4人。後の3人は広島の女子大生。

宿に着くと主人の母の90歳を超える老婆が挨拶にきた。「おめえだつ、どこから来た？」女子大生の一人は出身が山口県だったので「山口から来ました」と答えたとたん、さっと老婆の顔色が変わり、奥の部屋へ引っこんでしまった。私たちは何が起きたのかわからず呆然としていると、ご主人が入ってきて教えてくれた。「山口の人がいたんだって！うちのばあちゃんの祖父は百姓だったが、戊辰戦争で長州に殺されたんだそうだ。だから母親からずうっと長州の悪口を聞かされて育って、いまでも長州は敵みたいなものなんだ」

それを聞いた当の女子大生が言った。「そういえば、旅行に出る前にお母さんから言われていました。この日本にもあなたがお嫁に行けない土地があるのよ。会津に行っても山口と言わずに広島から来たと言いなさいねって」

しばらくして老婆が気を取り直して部屋に戻って来た。「おめえたつ、飯盛山へ行ったが？」女子大生は飯盛山へ行って来たこと、そして、そこで果てた白虎隊の少年たちに涙したことを話した。老婆は何も言わず、会津の町の古地図を広げてこう言った。「この地図ば見て、なんか変だと思わねえか？」私も見たのだが、わからない。「よおく見でみろ。この町には川がねえ。川のない町には百姓は住めねえ。この町は百姓の、おらたちの町でねえ。この町は百姓を苦しめるために侍が作った町だ。だから会津の城が落ちたときも百姓はだあれも侍の味方ばしなかった。百姓を苦しめてきだから、百姓に見捨てられただ。だから、白虎隊などなんにもかわいそうでねえ。あいつらは死ぬしかなかったんだ…」

夕食後、皆で炬燵で酒を飲みながら話をした。また老婆が話に加わった。炬燵を囲んでいる部屋は会津の旧家の離れ然としていて、茶箪笥の中には古ぼけたこけしが並んでいる。近くに、自分でこけしを作らせてくれる旅行客相手のこけし工房があり、女子大生たちは昼間そこでこけしを作ってきた話をしていた。

老婆が言った。「おめえたつの作ったっちゅうこけしば見せてみろ」。女子大生たちはバッグからこけしを取り出した。やや間をおいて、茶箪笥の古いこけしたちを指さして老婆は切り出した。「あの古いこけしば見でみろ。赤いべべだの、赤いかんざしだのつけできれいにすているが、目はみんなどごどなぐ悲すい目をしでいる。どうしでだがわがるが？」。たしかにその通りだった。古いこけしたちに何か不思議な感じを覚えていたが、それは淋しげな、そして悲しげなまなざしが、きれいに着飾った容姿とちぐはぐな感じを与えていたのだ。

「おめえたつは知るまいが、むがすはあかんぼうが生まれでも、おとこなら育てだが、おんなだば、むだめしぐいといわれで、生まれですぐに殺されることも多かったんだ。まびきっつうてな、どの親もいつどやにどは思い出がある。その子どものこどを考えるど、寝でもさめでも悲しぐで、悲しぐで、母親はその児のことを思っで『あの児が生ぎでいだらこんなべべ着せてやりたかった。こんなかんざしも挿してやりだがった』そう思いながら、死んだ子どものかわりにきれいなべべや、きれいなかんざしをつけてだいずにつぐっでかざっだのがこげしなんだ。だがら、いぐらきれいなべべ着でいても、そんな母親の気持ちがつだわっで、どうしでも悲すい顔になるんだ。だがら古ういこげしはみいんなおんなばかりでな、どれも悲すい顔ばしでる。子どもを殺す、子どもをけすからこけしなんだ」

追悼記

ー無二の親友
故藤山寛美をしのんでー

日高医師会
石井病院
堀田　温

舞台やテレビで多くの人々を笑わせた松竹新喜劇の藤山寛美は平成2年5月に亡くなりました。故藤山寛美は私の無二の親友でした。

過去、現在に彼ほどの友人は居ません。

藤山寛美

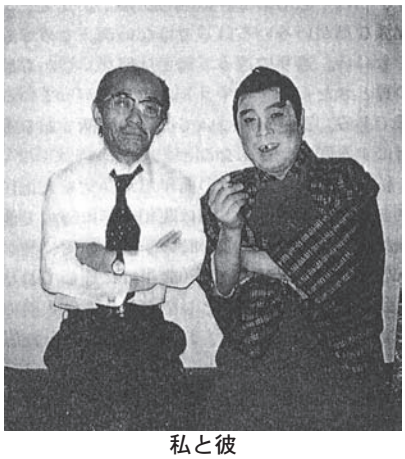
藤山寛美（本名：橋垣完治）は昭和4年生まれで、肝疾病のため多くの人々に惜しまれつつ60歳で他界しました。

私が大阪在住のころ、主に私の家で麻雀をしたり、雑魚寝をして、寝食を共にする親しさでした。当時まだ若くて、夜の巷へとよく出かけました。二人はアルコールには弱いのに、女性には目がないことまで一緒で、朝帰りもしばしばで、お互いにアリバイを作ったこともありました。当時世間知らずの二人は色街ではよい鴨でしたでしょう、医者、役者、芸者の「三者」が夜を徹して遊びました。昔の良き時代の思い出です。

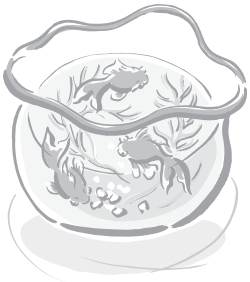
さらに彼は「親馬鹿、子馬鹿」で超有名人となり、多忙となり、二人の遊びはうんと減りました。彼の楽屋で二人きりになると、「昔は面白おましたな!!」「なんぞおも

ろいことはおまへんか？」とか「金はいろいろと付き合いで使うけど、なんもおもろいことあらへんわ!!」と呟いていました。「大看板」の重荷に耐えていました。どこへ行っても、常に笑顔を振りまいていた彼の姿は、かわいそうな気の毒な姿でした。気配りをこの上なく大切にした役者、そして正直な男、藤山寛美は多くの人々に惜しまれてあの世へ旅立ちました。

私にとって、掛け替えのない大切な友!!考えるほどに残念であり、寂しいの一言につきます。
合掌!!



私と彼



沖縄家族旅行

上川郡中央医師会
老人保健施設回生苑　**水野清司**

沖縄の海が大好きで何度か沖縄旅行をしているが、新しい思い出づくりのため総勢11名で、平成19年11月22日から3泊4日で、今回が最後になるだろう沖縄家族旅行を満喫してきた。

7年振りの綺麗な青い海と美しい夕焼けに感動し、素晴らしい体験や楽しい時間を過ごすことができたことはもちろん、他に大切な目的があった。それは沖縄の友との再会であった。

医学校時代の学友で沖縄県出身の富名腰良善君が息子さんに医院を譲り、沖縄県の金武町の介護老人保健施設の施設長として勤務していたとき、北海道医報に掲載された私の「傘寿になって幸せに思う」と題した原稿が、日医ニュース「南から北から」にも選ばれ掲載されたのを見て、大変感激して私に手紙をくれたことが再会の発端になった。

沖縄旅行が決まったとき、すぐ彼に家族で沖縄へ行くことを知らせ、再会を約し、その日を楽しみに待っていた。

沖縄旅行の初日、思納村のルネッサンスリゾートホテルから彼のところへ電話をした。電話に出た息子さんの話では、その後彼は体調を崩して介護老人保健施設を退職し、現在は歩行もままならず、車椅子を使用しての日常生活になっているとのことだった。

旅行最終日の午後に、何とか宿泊先のロワジールホテル那覇で再会することになった。

当日、ご子息ご夫妻の温かく優しい介護に付き添われた彼と対面。束の間ではあったが、感激の握手で涙ぐみながらの再会が果たせた。厳しかったあの医学生時代をともに過ごしたという共通の体験があるだけに、心に深い感銘を受けた瞬間だった。

今回のもう一つの目的は妻が老化による脊椎疾患で脚が弱り歩行がままならず、外出の機会が少なくなったので気力の向上になればと勧めた沖縄旅行だ。妻とも何度か沖縄へきている。7年前は親兄弟5人だけで石垣島へ出かけた。石垣島本島はもちろん、竹富島、西表島、由布島を観光して離島気分を満喫した楽しい旅行だった。妻が特にお気に入りだったのは、西表島から由布島へ向かう浅瀬を渡る水牛車だ。記念写真用の水牛に跨り得意満面だった。竹富島では集落の白砂を巧みにひく水牛の名前が「八重ちゃん」といい、妻と同じ名前なのでみんなで爆笑したものだ。今考えると確かに、石垣島地方は八重山諸島と言われ、水牛に八重という呼び名を付けても当然かもしれない。妻は根っからの動物好きで、子どもたちが今回のツアーのオプションに母親が喜びそうなイルカショーや水族館見学をセットしていた。

沖縄へ着いてからの気温は20度前後、半袖では少し涼しく、早朝の観光船に乗ったときなどは上着を羽織ってちょうど良いくらいだった。2日目にジンベイザメやマンタが泳ぐ大水槽で有名な美ら海水族館に行った。駐車場から水族館までの距離が長く結構歩くので、初めて妻を車椅子に乗せた。意外に乗るのを嫌がらず機嫌よく乗っていた。家族には看護師2人、介護福祉士1人がいるので私が手を出すまでもなく、交代で要領よく車椅子を押していた。週末らしく、館内のいたるところで米海兵隊員やその家族の姿が目についた。

沖縄へ行く楽しみにはいろいろあるが、その大きな魅力が、亜熱帯特有の色鮮やかで目に染みる原色の自然、琉球文化を色濃く残している建造物と街並、生活が息づいた通りや小路、そして人との出

会いだ。2日目の夕食はルネッサンスホテルから数百m先の「浜の屋」。長男の沖縄の知人が手配してくれた店だ。地元の新鮮な魚介類を食べさせる店として有名らしい。長男お奨めの伊勢海老のウニ焼きを頼んだ。伊勢海老のウニ焼きは半身が二つ出てきた。甘くやわらかい伊勢海老と焼かれたウニが香ばしく、本当に美味しかった。

食事中、琉球がすりを着た若者が三線を持って店の中に現れた。せっかくの沖縄での食事、宴席を盛り上げて沖縄ムードに浸ろうと息子たちが頼んでいた三線奏者だ。

まずは「てぃんさぐの花」を沖縄ことばで歌った。染みるような歌声だった。みんな、箸をとめて聞いていた。彼から詩の意味を聞き、なお一層感動深かった。彼は名護市の名桜大学観光産業科を卒業して今は沖縄の観光施設「琉球村」で沖縄民謡の演奏をしていた。三線を弾く父親の影響を受けて、いつの間にか自分も弾くようになり、今も沖縄民謡が一番好きだと力強く語っていた。自分の生まれ育った沖縄の文化を大切に継承していこうとしている青年に出会い、琉球の心に触れたようで、さわやかな気持ちになった。彼の歌うメロディーの哀調としみじみした詩が心を打ち、後日、詩の内容を調べてみた。

一. てぃんさぐぬ花や　爪先(チミサチ)に染めてぃ　親(ウヤ)のゆし言や　心(チム)に染(ス)みり
二. 天(ティン)ぬ群(ム)り星(ブシ)や　読(ユ)めば読(ユ)まりしが　親(ウヤ)ぬゆし言(グトゥ)や　読(ユ)むやならん
三. 夜(ユル)走(ハ)らす船(フニ)や　ニヌファ星(フシ)みあてぃ　我(ワン)ん生(ナ)ちぇる親(ウヤ)や　我(ワン)んどぅみあてぃ

一. 鳳仙花の花は爪先に染めて、親の言うことは心に染めなさい
二. 天に群れる星は数えようとすれば数えられるが、親の教えは数えきれない
三. 夜の海を行く船は北極星を目安に、私を生んだ親は私を見守り続けて生きている

昔の子どもたちは鳳仙花で爪を染める風習があったらしい。無理に親が子どもに教えなくても、子どもたち自身がこの歌を口ずさみ、人生訓として自然に心に染み込んでいったことを考えると、沖縄の親を大切にする心に熱いものを感じた。

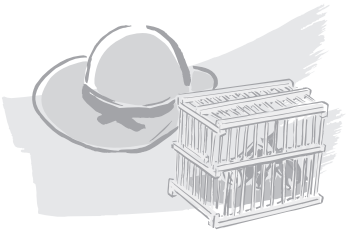
3日目は琉球村へ。ここでは琉球王朝文化や庶民の風俗、習慣、信仰に根ざした芸能、祭礼などの歌や踊りをたっぷり楽しむことができた。初日、2日目に反して、高く澄み切った青空からは沖縄らしい眩しい日差しが強く射していた。琉球村を後にして海中道路へ、本島の与勝半島と平安座島の4Kmを結んでいる。橋ではなく、海峡の浅瀬に土を盛り上げて作った道路だ。真っ青な海を分け入るように直線が続いている。昼食をとるためビッグタイムリゾート伊計島に車を走らせ、伊計大橋を渡り左に曲がると、ふと海岸が白く開けた砂浜が見えた。子どもたちは慌てたように車を停車させ、小休止。看板を見ると伊計ビーチと書いてあった。ビーチはシーズンオフで、われわれ家族以外に誰もいない、贅沢なプライベートビーチが広がっていた。みんな童心に帰り、海に足をつけて歓声をあげ、写真を撮ったりはしゃいでいた。道沿いの小高い草むらを見ると、沖縄独特の大きな墓があった。近寄って見ると立派なものだ。沖縄独特の亀甲墓と言われる大きなお墓で、女性の子宮を象ったものと言われている。人は女性から生まれて、死んだ後、またその胎内に戻るということらしい。

沖縄最後の夜、那覇市内の琉球居酒屋「山猫屋」で夕食、ここは本場沖縄料理の店だ。ここでも三線演奏を手配していた。時間がなかったので数曲だったが、アルバイトをしている沖縄芸術大学の女子学生が一生懸命演奏してくれた。食事をしていた観光客もわれわれのテーブルの周りに集まり、みんなで沖縄民謡を合唱して大いに盛り上がり、沖縄最後の夜をにぎやかに過ごした。

今回は、看護大学の卒業試験のため参加を断念した孫1人を残しての家族旅行だった。企画、会計、運転、介護、撮影それぞれがそれぞれの役割を果たし、楽しい旅にしてくれた。友との再会、妻の気晴らしという目的も果たした。沖縄に初めて行った孫もいたが、沖縄の暑い日ざし、青い空、誰もいない白砂、乾いた三線の響きなどに強く沖縄を感じてくれたようで、良い思い出になったことと思う。

これが最後の沖縄旅行。

医師としての人生や年齢からみて、とっくに折り返し点を過ぎてしまっており、残りの時間を後悔しないよう医師としての仕事を喜びとして毎日を送りたい。そう考えながら、感動を新たにした大きな癒しになった沖縄家族旅行を思い出している。



「医師」?「医士」?

遠軽医師会
遠軽学田病院
田端秀行

長い間、何で医師は「師」で「士」ではないのだろうか?と、漠然と不思議に思っていた。弁護士にしろ代議士にしろ、それなりにプロフェッショナルと呼ばれる職業は士であり、医師は教師と同じ「師」をいただいている。

あることがきっかけで、その謎は解けたが「医師」と呼ばれるに至るまでの歴史を知るとさらに驚いた。「医業は長らく卑賤の職業で、これが尊敬されるに至るのは明治時代も末期のこと」とか。

日本の歴史上「医師」の文字が現れるのは、奈良・平安時代の律令国家誕生と時期を同じくする。大宝年代(700年代)に『大宝令』の中に「医疾令」が制定され、天皇を中心とした朝廷内に診療組織が誕生した。それは国営医療制度で、事務一般を実務とする中務省と実務(医療)を行う宮内省所管の典薬寮に大別され、「医師」は針師や薬園師などと同列に後者に配属された。「医師」は、単なる官職名に過ぎず、前述の「人を導く人」のような尊敬される職業ではなく「診療技術に優れた人」の域を出ない卑しい人であり、実際、宮中の身分も極めて低かった。

日本の律令国家は、中国大陸の思想や制度を色濃く反映した。中国大陸の古代史を眺めた場合、戦国時代から秦王朝時代を経て漢王朝に至る間に、それまでの雑然とした思想界が統一され儒教思想に基づいた社会の階層が成立した。そして、天子・諸侯・太夫・士・庶民の五階級が固定化された。天子・諸侯を別格で全ての階級の上に位した。太夫と士は併称して「士人」と呼ばれ(学者や知識人の意味である「読書人階級」とも称された)、官使の身分を独占した。士人階級だけが、天子や諸侯に仕える臣下で、君主の命を受けて庶民を支配する特権階級であった。ここで重要なのは、儒教的な階層社会を維持するために、文明の発展に貢献した土木築城・測量・数学などの経験的な技術者集団は庶民階級に組み込まれてしまった。この階級社会の中では儒教などの学問研究(主に読書人階級がこれを行った)こそが高貴であって、技術は「方技」と呼ばれ、卑しい身分の者が支配層のために使うこれまた卑しい技とされた。医を「方技」として持つ者も当然卑しいとされた。現代風に解釈すると、文系は高貴で理系は卑賤といった具合だろうか。

日本の律令国家が滅び武家政治に移行しても、これらの思想・制度は、むしろ強化されて受け継がれた。実際に徳川時代には「士農工商」の揺るぎない身分社会の中で、医術を用いる者を工(職人)と同列とされて士階級からすると賤しき者とされた。将軍家など位の高い人を診察する際も、手首に巻いた絹糸を別室で「糸診」し、体に触れることなど決して許されなかった。

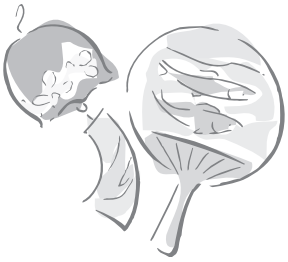
維新の混乱を経て明治国家が誕生した。新政府は、必要に迫られて「医師」という官職名を復活させ、医術を用いる技術者を西洋並みの尊敬に値する「身分」にまで格上げし、医学も国学など文化系と同等の学問とした。

しかし、千年以上の歴史観は一朝一夕で改まるものではなく、できたての東京大学でも、文化系の教授は医学教授と同列視されるのを屈辱と感じた。にわかに高貴となった「医師」は、意気込みこそ「西洋医学を皇国に」と志士のようであったから、その鬱屈した感情が自らを「医士」と称する現象を生んだ。あの森鴎外でさえ論文や投稿記事に「医士」と書いている。

このような混乱期があり、「医師」と“統一”されたのが明治も末期となった。

大正昭和にかけて、医師の地位は向上し盤石となっていく。

最近、医師は以前ほど尊敬されていない気がする。先人の苦労を忘れた平成の医療技術集団に対する警鐘だろうかと愚考した。



私と固定観念

寿都医師会
黒松内町国民健康保険病院　秀毛寛己

北海道で社会や地理以外でもっとも印象に残り小学生の時から知っていた地名は、ＴＶのＣＭで見たニッカウイスキーの余市と、鶴岡雅義と東京ロマンチカの『小樽の人よ』の小樽だった。前者は馬が深々と降る雪の中を荷車を引いて樽を運んでいるような描写だったと思う。“よいち”という聞きなれない響きとウヰスキーという表記と蒸留工場という神聖そうな人里離れたイメージを融合させ膨らませて以来、余市と聞くたびに馬が深々と降る雪の中を歩いている北の寂しい街の光景が想像の中でよみがえった。

小樽という名前も哀愁を帯びた切ないギターのイントロとともに「粉雪舞い散る」という歌詞で駅に粉雪が降り積もり凍えるような寒い所というイメージを持った。考えてみれば、いつも雪が降るはずもないのに小樽＝粉雪が舞い散る、余市＝馬が樽を引いて深い雪の中を進むという構図で、行ったことも見たこともないのに心象風景として固定化し幾度か反すうしつつそんな北の街が存在するのだというなんともいえない寂寥感を覚えるようになってしまったのだ。

ところが何の偶然か北海道で仕事したいと思い照会したときに迂闊にも北海道＝大きな離島、奥尻＝小さな離島といったほぼ等価な感覚であったことを思い出す。心情的には札幌も奥尻も同じように対等に捉えていて地震の被災地という共通項で親しみを感じて奥尻をちゅうちょなく選んだ。小樽や余市みたいな固定イメージを持たなかったために価値観の評価尺度がなかったのだと思う。

4年後に黒松内にやってきて同じ後志に余市も小樽も存在するのを知った。

意外なことに、余市はさくらんぼとフルーツの町で日当たりの良い、マリンブルーの明るい大都市近郊の海浜リゾート田園都市といった風情だった。どこにも樽を引く馬はいなかった。小樽も同様。粉雪舞い散るなどといった物悲しさなどどこにもない。それどころか神戸にある面で瓜二つの瀟洒で重厚な歴史を刻んだ坂の港街だった。

道産子に出身地を聞かれて神戸としかたなく答えると決まってせん望にみちた表現で以下の単語が返ってくる。異人館とか異国情緒とか神戸牛ステーキとか1,000万ドルの夜景とか。一度住んでみたい街とかファッション都市とかおしゃれできれいな女の子が多いとかはさておいて、別に神戸っ子が毎日ステーキを食べているわけでも夜景を見るわけでも、異人館に行くわけでもない。幼少時よくトンボやバッタなんか昆虫採集して遊んだ布引北野町の原っぱの中の一風変わった旧びた洋館がいつのまにかＮＨＫの風見鶏とかいう朝ドラのせいで観光地のメッカのように変貌していることを知ったときは路地が商店街に変身したぐらいにびっくりした。大衆の期待に沿うように修正し造られたイマージュの街角が出現したのだ。

固定印象で他人から評される苦痛と訂正する煩わしさは、きっと余市や小樽のひとも同様だったに違いない。かつての外国人の想像する日本人の生活が着物を着て富士山を見てすき焼きを食べているみたいな幼稚なものが多かったとあながち批判はできない。

誤った一面的固定観念といえば、大学医学部をいまだに白い巨塔などというのも相当時代錯誤な話だが、逆に救急車は、最近の患者？つまり乗ってくる側が、重症という社会の標識的認知観念をかってに崩してしばしば夜間タクシーだというふうに都合よく流動的解釈をしてしまってこれも大いに医療サイドのみならず社会に困惑を与えている。医療においては医療者側に都合の悪い世間の評価観念のみが時間を超えて固定化されるようである。火のないところに煙は立たないという妙なことわざが不確実なものにも当然のごとき先入観の因果関係を冤罪をほう助するごとくに半永久的に付与してしまう。医者は、ビルを所有し高級外車に乗って高額納税している（脱税も）。・・・はなはだ迷惑な話だ。小樽の人が毎度粉雪の舞い散る寒い駅ばかりを利用させられたり、馬車で酒樽を運ぶ光景が今どき余市で見られるわけないだろうがと（自嘲的に）言いたい。

医療危機の時代に思う

旭川市医師会
道北勤医協一条通病院　渡辺一晶

医師不足をはじめ医療現場の混乱が露呈し、わが国の「医療崩壊」が懸念されている。現状打開に国を挙げて模策しているが、打ち出される政策が「医療費適正化」という名の低医療費政策統制下に置かれている感がある。その昔にも、国民が究極の統制下に支配され、医療の分野も医師不足をはじめさまざまに蹂躙された悲惨な時代があった。

15年戦争終盤のころ、国民の体力低下、結核罹患の増大などで甲種合格徴兵者は極端に減っていた。政府は健民健兵政策を立て直すため、1942年従来の医師法等を改正した「国民医療法」を制定し、医療の直轄体制を敷いた。医師の徴用が強化され、国内医師総統計からみると、1941年6万7, 612人、1943年3万4, 423人に激減し、敗戦の翌年1946年にようやく6万5, 157人と平時数に接近した(「現代日本医療史」川上武)。県単位別では、滋賀県医師会の場合1944年会員440人中213人48%が召集され、召集された医師の28人12%が戦死したという資料が残されている(「医師達の十五年戦争」莇昭三)。

「軍医予備令」に応じた医師以外にも多くが召集され、医師不足の現状は深刻であった。政府は弥縫作として開業の制限、新卒医師の勤務地指定、無医地区での医療機関のベッド削減・整備統合などを強制し、召集されなかった都会の医師を重要工場・施設の医務室に徴用し、軍務以外の医師会員には「決戦医療班」を作らせた。また現実化しなかったが、医師不足を補うため歯科医で医師を希望する者の試験の受け付けもした。

時代背景は違うが、医療に携わる者として、間違った政策の下では誰もが不幸になるという教訓として覚えておくべき歴史かと考える。当時、戦時下に置かれた医師たちの想い推して知るべしだが、今は今様の過酷さがあり、特に勤務医師には過重労働と立ち去りを強いている。加えて医療関連事故死に対する司法介入によって診療萎縮も起きている。勤務医師の減少傾向は、医療経営の困難さと相まって地方の相次ぐ病床閉鎖、都市でも救急、小児科、産科の閉鎖・縮小等を顕在化させている。

わが国の医療はＷＨＯ総合医療評価が世界一と誇れる一方で、医療費がＧＤＰ比8%（ＯＥＣＤ加盟国平均9%）、医師数は千人当たり2人弱（先進国3人）という見劣り甚だしい現状がある。この乖離現象の下に、起こるべくして生じている矛盾に手を付けようとせず放置してきた国の「無作為」の「作為」は当然責められるべきものである。そして近年の医師会論調にも見られるが「無作為」を助長したのが、小泉元首相の「構造改革」にあったといえる。国民には奥羽越戦争に敗れた長岡藩の逸話を引き出しての「米百俵の精神」を説き、市場原理万能を振り撒いた。結果、あらゆる分野に効率・競争・痛みを強いて格差社会を拡大させ、医療の現場にも「改革に聖域なし」と容赦をしなかった。我慢に我慢を重ねても「石の上、3年経って次の石」が置かれ、あの「百俵」は何処へ行ったのだろう？「骨太の方針2006」を置き土産に去った小泉純一郎氏は今更ながら「不純な人」であったと思いを新たにする。

現状の「制度疲労」修復のため、新たなパラダイム構築に向かうことに異論はなく、医師会の若い論客たちが、政策作りに積極的に関わっておられる労を多とする。戦時下の官製医師会が、唯々諾々と国の方針を受け入れた時代とは違い、医療の現場と地域の実情に立脚して奮闘されているのは頼もしい限りである。さらに要望だが、政府機関との論戦を通じ「医療は医療を受け持つ者が受ける者と共同して行う作業である」ことを根本に置いて、トリクル・ダウン論の市場原理主義を排し「医療を含む社会保障の充実こそが平時の国の安全保障である」という文化を、この機にぜひとも根付かせていただきたいものである。